

広島市の白潮公園の岸辺を守る意味

広島干潟生物研究会
事務局 久家光雄

1 白潮公園の立地と現状

広島市内を流れる六河川は、そのほとんどの流域が人工護岸となっています。干潮時に護岸の内側の一部が干出するところは何か所かありますが、満潮時にはその大部分は水没します。わずかに図の緑色で示した地点では、干潟に続く後背地があり、ヨシなどの自然植生が見られます。

かつての河川整備は、市街地を守るために上流で降った雨水をできるだけ早く海に流し出そうという発想で進められました。ですから日本中

の都市部の河川が二面または三面をコンクリートや石垣で固められ、いわゆる水路となりました。この結果、本来自然状態の岸辺やよどみに生息する生きものたちは大半が市街地流域から姿を消してしまいました。

ところが、京橋川から猿猴川が分岐点するすぐ上流部、広島駅からわずか 1.5 キロメートルしか離れていない都心部の一角に、昔ながらの川岸の景観をほうふつとさせる場所があるのです。それが、白潮公園東側の岸辺です。

公園から川に向かうと、雑木林→固い地盤の崖地→小石混じりの砂泥地またはヨシ原→広い干潟→水辺といった順に多様な環境が現れ、かつて市内の全域で見られたであろう自然の岸辺が小さな規模とはいえ、奇跡的に残っているのです。人工の護岸がないわけではありませんが、長い年月の間に崩れており、川の蛇行の内側に位置するため岸辺がえぐられることもなく、運良く放置されてきたのです。公園と川が隣接していたことで車道や住宅地の敷設を免れたのも幸運でした。



白潮公園の位置



市内の人工護岸の例



白潮公園東側の岸辺

2 白潮公園の岸辺の生きもの

白潮公園は、感潮域（満潮時に海水が押し寄せる河川部分）の上流部に当たりますので川の塩分濃度は低く、したがって河口域や海域の生きものはほとんど見られません。それでもここに生息する生きものは多く、カニだけでも 10 種類ほどが見られます。また今では市内でほとんどここでしか見られなくなった生きものたちも生息しています。その代表が、ハマガニとヒトハリザトウムシでしょう。前者は昨年 10 月 23 日の夜に出会いました。後者は昨年 5 月に見つけました。

【ハマガニ】

ハマガニは、兵庫県、徳島県で「絶滅危惧Ⅱ類」、愛媛県、福岡県で「準絶滅危惧」の категорияに入っています。広島県ではこれまで何も指定はありませんでしたが、昨年ようやく「要注意種」に指定されました。



ハマガニの成体

私は、ハクセンシオマネキ（広島県で「準絶滅危惧」に指定され環境省では「絶滅危惧Ⅱ類」に指定）よりもむしろ生息地は少ないと感じています。ハクセンシオマネキはすでに市内の 14 か所で確認（未発表）していますが、ハマガニは市内本土側ではそれまで八幡川河口以外では見たことがなく、白潮公園のハマガニは 2 か所目でした。なお今年の夏には広島干潟生物研究会の女子中学生が、塩生植物の調査中に太田川

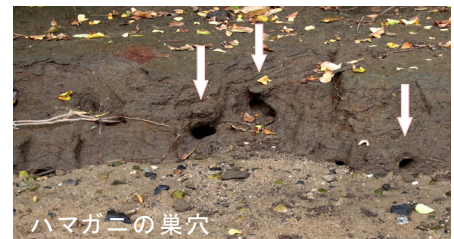
放水路右岸でも生息していることを確認しました。

ハマガニは、土質の硬いところに巣穴を掘ります。大きい個体だと、直径 10 センチメートル、深さ 1 メートルほどの巣穴を掘ります。地盤が軟らかいと深い巣穴は崩れてしまいますし、石や岩だらけの場所では思うように巣穴が掘れません。したがって彼らがすすめるか否かは、まずその場所の底質で決定づけられます。エサはヨシなどの植物の葉です。たくさんのハマガニがすむためにはある程度の広さの、安定したヨシの群落もまた必要です。ヨシの群落はエサ場であるだけでなく、動きののろい彼らにとっての臨時的隠れ家ともなります。これらの条件をすべて満たしているのが白潮公園の岸辺なのです。

【ヒトハリザトウムシ】

ヒトハリザトウムシは環境省で「準絶滅危惧」、岡山県、愛媛県そして広島県でも「準絶滅危惧」の категорияに入っています。体長 4～5 ミリメートルほどの小さな生きものですが、脚が細長く、前から二番目の歩脚は 7 センチメートルにもなります。本来ザトウムシ類は山地の自然度の高いところに生息していますが、このヒトハリザトウムシは日本で唯一、海岸線に沿って分布しています。昼間は洞くつや張り出した巨木の根の下、岩陰などに大群で潜っており、夜間に周辺に出歩いて小動物などを食べています。

県内ではほとんど島しょ部に生息地が限られ、内陸部ではわずかに広島市縮景園、福山市芦田川河口から記録があるだけです。この白潮公園は縮景園とほぼ隣接していますし、自然度の高いことから期待はしていましたが、昨年予想どおり多数生息しているのを確認しました。太田川放



ハマガニの巣穴



ヨシ原

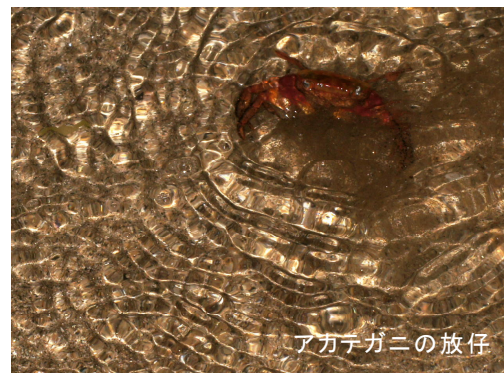
水路でも三滝橋付近の小さなヨシの群落中に体長2ミリメートルの幼個体を数匹見つけました。しかし、その下流に広がる自然度の高い塩生植物地帯では専門家がくまなく探しても見つかっておらず、あとは天然の照葉樹に覆われた元宇品の海辺が期待されるくらいでしょうか。ヒトハリザトウムシの群生地が市内では縮景園、白潮公園の岸辺に限られているということは、とりもなおさずそこだけは細々とはいえ、昔ながらの自然が安定して今も残っている証左といえるでしょう。



【カニ類】

白潮公園の岸辺には、ハマガニ以外にも多くのカニが生息しています。おもしろいことに、ほとんど水に入らないハマガニ、アカテガニ、ユビアカベンケイガニ、塩分濃度の低い水を好むクロベンケイガニ、塩分濃度のやや高い水を好むアシハラガニ、ヒメアシハラガニなどが同居しています。

アカテガニは、ふだんは干潟の後背地のヨシ原、さらには陸域の土手、山林などにすんでおり、かつては本州以南の海岸線地域ではどこにでも見られた普通種でした。一昔前、旧市民球場（中区基町）で広島カープの選手がロッカーを開けたら赤いカニが出てきたという逸話の主は、このアカテガニだったと思われます。夏の夜、大潮の満潮時をねらって海岸線に集まり、水面で全身を素速く揺すって放仔（卵の中ですでに幼生になっているので産卵ではありません。下の写真でカニの腹部周辺に見える黒っぽいもやが幼生。）するのは有名です。ところが、彼らが日ごろ生息しているヨシ原や陸域が全国的に減少し、残っていたとしてもそこと海岸線の間が車道や宅地などで遮られて産卵のための移動ができなくなるなど、大きなダメージを受けています。そのため、兵庫県や、高知県をのぞく四国三県、熊本県などでは「準絶滅危惧」種に指定されており、広島市では「要注意」種となっています。白潮公園の岸辺はアカテガニの生息密度が市内で最も高く、アシの群落の中や岩の割れ目などに普通に見ることができます。



ユビアカベンケイガニはその名のとおりに、ハサミ脚の先端に赤いマニキュアを塗ったようなおしゃれな小型のカニです。アカテガニと同様ほとんど水に浸からない場所に生息していますので、分布域は重なり合います。ただ、ユビアカベンケイガニは水辺からそう遠ざかることはありません。ユビアカベンケイガニもアカテガニ同様、かつては干潟やその後背地にたくさん生息していたと思われますが、現在市内で見られるところはほんの数地点です。日本ベントス学会がまとめたレッドデータブックでは、「準絶滅危惧」種にランクされています。



クロベンケイガニは、感潮河川上流部の岩の割れ目、石の下、ヨシ原にすむ中型のカニで、ハサミ脚の基部や身体が紫色を帯びており、歩脚に剛毛がまばらに生えていますので見分けられるはずです。市内で見られるのは「相生通り」より北側で、満潮線より上に岩の割れ目がたくさんあれば比較的普通に生息しています。この白潮公園の干潟ではほかの地点に比べて格段に個体数が多く、いわばクロベンケイガニの楽園とでもいえましょう。

3 白潮公園の岸辺を守る意味

このように白潮公園東側の岸辺は、市内はもとより、県内でもまれに見る価値ある自然度の高い場所です。そこではそんな環境にしかすむことができない生きものたちが、細々と命をつないできました。

しかしながら、うす暗い雑木林、根がむき出しの巨木、崩れそうな護岸、背丈を越えるほどのヨシの群落、広い泥干潟などは、一般市民にとっては見苦しいもの、不快なもの、都市空間にふさわしくないもののように見なされるようです。ただ、もしこの岸辺を浚渫し、護岸工事を施してほかの場所と同様にしてしまったら、これらの生きものはたちまちのうちに絶滅するでしょう。この地点での絶滅は広島市域での絶滅をほぼ意味しますし、広島県全域でも大きな打撃となるでしょう。また干潟の消滅によって水の浄化作用も低下し、土地本来の緑が減り、大気によって影響があるかも知れません。

昭和 45 年ごろ広島城の堀りの底にシートを敷いてから、何万匹ものコイが死に、トンボやバッタが消え、白鳥が卵を産まなくなりました。挙げ句の果てにはユスリカが大発生したため大量の殺虫剤を堀りに投入し、ますます生きもののすめない堀りへと悪循環を招いたのです。ことの発端はこの周囲の高層ビルの建築のために堀りの水位が下がったことに起因しますが、むき出しになった草地や泥、水たまりが広島城の堀りにふさわしくないという一般市民の声とそれを真に受けた行政も加担しています。その一見醜い空間がどれだけ多様な生きものたちをはぐくむことになっていたのかを知る人は少なく、知っていてもだれも訴えませんでした。行政は市民の声に応じて堀りを浚渫し、ビニルシートを二重に引き、巨大な止水域を作ったのです。その結果、堀りの底には分解しきれない有機物がたまり、数年で生きものが全くすめない水たまりに変貌しました。何十年経過した今も、ポンプを稼働させなければ水を清浄に保てないのです。この二の舞は何としてでも防ぎたいものです。

そのためには、地元の人々が、地元の自然の中に出かけてその環境にひたり、そこにすむ生きものと戯れ、自然のシステムを身をもって理解することからはじまります。それを子どもたちと共有し、代々伝えて欲しいのです。まさに干潟観察会はその第一歩なのです。

(2013/11/10 中央公民館主催「アシ原で遊ぼう・学ぼう in 白島!」資料)